



The Circle Salamander in
Mikotran

第二十三章
ミクトラン脱出

峯村 明

Salamander in the circle

第二十三章の登場人物

ダーヴェ	……	学術調査団の団長	上級賢者
ヒューダー	……	学術調査団の団員	民族・言語学者
イリチャ	……	ヒューダーが名付けた少年	
ヘルガ	……	エウメロス王国の王女	
スクナ	……	世界の果ての島の王に仕える者	
バイスロイ	……	黄金門の皇帝の息子	
ソルド	……	ケストル人警備隊長	
アマノカガセオ	……	シトリ族の後継者だった若者	
ミツハ	……	メッサナから亡命後のメルノの偽名	
オモイカネ	……	世界の果ての島の王に仕える者	

これまでの主な登場人物

ネウトラ評議会	ハイヤーン	本部科学者のリーダー	世界の果ての島	ホシナ	ホシナ族の族長 マミヤの父
	ティコ	科学者		オマキ	ホシナの妻
	ナシル	本部・事務職員		キト・コマ	ホシナ族の男たち
	ヤスウ	学術調査団の団員		ゴン	ホシナ族の男 (ヤサカオ族出身)
エウメロス王国	レル・ヴァリス	王室付近衛隊長		サノヒコ	王に仕える役人
	ヴァリス将軍	レルの父		フツヌシ	王に仕える者 将軍
	カール	王子 ヘルガの弟		ヤサカオ	ヤサカオ族の族長
	ロウナス	国務省の高官		チドリ	アマセオの妻
	アンテロ	レルの副官		ハマツ	チドリの養父
	摂政	亡国王の弟		タマシギ	ハマツの実子
ケストル王国	パウル	国王			
	ウルリク	第三王子			
	ヘンリク	ウルリクの息子			
	ホベオクー	ケストル人の美女			
黄金門市	皇帝	皇帝	メッサナ市	バンテオラ	メッサナ市の総督
	バドネル	バイスロイの参謀		バラム&バランケ	双子のジャガー バンテオラの部下
冥界	冥界王	冥界の王		メルノ	音楽家
	ベネトナシュ	死神		バレルダリス	メッサナ総督家の一人 臨時総督代理
	テクトリ	最下層ミクトランの主		メンドルブ	メッサナ化学者集団の代表

目次

ミクトラン脱出

362.

363.

364.

365.

366.

367.

368.

369.

370.

371.

372.

373.

374.

375.

376.

377.

378.

back number

第二十三章のあとがき

奥付

ミクトラン脱出

362.

「メッサナへ行く」という彼らの意志は不動にして堅固なもので、いったい、なぜそんな気になったものか。

ヒューダーの問いをソルドはぬらりくらりとかわし、評議会の身分証明書を返してよこし、「じゃ、な」、とあっけなく行ってしまった。

転送システムを用いてミクトランへ来ていたケストル人は十名ほどに減っていた。もっといたはずだが結局残ったのはそれだけで、全員がソルドに従ったのだった。

ぼう然自失しているヒューダーの背後で、ダーヴェは横目でバラムを見ていた。バラムは幾度もミクトラン-メッサナとを往復している。ひょっとしたら、尾行されたのではないかと思ったのだ。あるいは……尾行させた、のかもしれない。ケストル人の存在はわずらわしく、巨人族探索の支障になっていたから、なんとかならないものかという、言葉にはできない暗黙の気持ちが彼らの間にあったのは確かだったのだ。バラムにもその気持ちは伝わっていたのかもしれない、とダーヴェは思った。

「彼らは自分の意志でやって来て、自分の意志で出て行くというのですから。もう、考えるのはおよしなさい。ヒューダー」

「ああ……彼ら、これからどうなると思う？」

「……旅行者として手厚く遇されるんじゃないですか？」

思わず顔を見合わせるふたりである。

バラムはネコそっくりの大あくびをして寝そべってしまった。まったく我関せずである。バラムとバランケが元の飼い主パンテオラからどんなふうにしつけられていたものか、ダーヴェにもヒューダーにも、コモラにもわからなかった。

363.

その様子を一部始終傍観していたスクナはやがて、改まった面持ちで口を開いた。「ダーヴェどの」、と。
「以前、云われましたな、『冥界は天の川の暗黒星雲に対応している。暗黒星雲が上空にある夜間ならば地上にでるのは可能なのだ。しかしそれに適しているのはメッサナだけである』、と」

「——ええ、あとは絶海の孤島、深海、深山あるいは幽谷だったりします」

スクナはごくりと喉を鳴らした。「私には瞬間移動の能力がある。その力をもってすれば、ここから脱出し地上へ出ることは可能ではないかと、こう考えるのだが」

ダーヴェはスクナに顔を向けてまじまじと目をあてた。「それは……確かに可能ではあるかもしれませんが……」

すかさずスクナはうなずいた。「やはりそうか！」

「可能ではあるかもしれませんが！　しかしひじょうに危険です！　私は瞬間移動で地上とここを行き来したという事例を知りません！　なにが起こるのか想像もつかない！」

慌てるダーヴェを前に、スクナは腕組みをして応じた。「やってみればよいではないか。絶海の孤島、深海、深山あるいは幽谷に出る可能性が高いのですな、ならば、海の底、水の中、山の塊の中にでる可能性を避ければよいだけの話」

「スクナさん、それもありますが、それら危険極まりない箇所を避けたとしてですよ、瞬間移動にどれくらいのエネルギーが費やされるものか、わかりますか！？ 運よく孤島や深山に出たとして、力を使い果たして進退窮まるかもしれないのです、あなたは地上のどことも知れぬ場所に島流しになってしまうかもしれない！！」

スクナは腕組みをしたまま、ぐっと顎を引いてダーヴェを睨むようにみて言った。「なんとかなる」

「なんとかって——」

腕組みをほだき、自分の胸をどんと叩くスクナである。「いける。大丈夫。なんとかなる。そんな気がしてならんのだ」

「そんな気がするというだけで！ 貴方は！ ご自分がどれほど無鉄砲なことを試そうとしているのか、わかっておられるのか！！」

ふだん温厚で軽いダーヴェがさすがに顔色も口調も変わっていた。

「ではお尋ねするが、ダーヴェどの、貴殿はマミヤの跡を追って転送システムに身を投じたそう。そのとき、絶対の安全を確信しておられたということですか」

スクナの反撃に、根っから正直なダーヴェは咄嗟に言葉が返せず、ぐっと詰まってしまう。返答の代わりにその矛先はヒューダーへと向いた。

「な、なにをうなずいているんですか、ヒューダー！！」

「絶対の安全を確信していたとは思えんなあ。どこへともなく消えてしまった先生の跡を追って、体の弱い文官のこのオレが、命がけの冒険の数々をこなす羽目になったのだった……！」

「それはすまなかったと思っていますよ——！」

「先生、この世に絶対の安全など、あるものか。保証された生命などないと、オレは思う。だからオレは、すすんで先生の跡を追ったのだ」

「あなたはきっと来てくれると思っていました……」

「もしオレが追跡を拒んでいたら？」

「あの時か、それとも、あの時か——私はどこかで命を落としていたでしょう……」
ダーヴェの口ぶりは、彼が幾度も危険な目に遭遇していることをうかがわせた。

「地上世界の秩序はすでに狂いかけているとオレは感じていた。保身を考える余地などなかった。今このとき、己にできることをするだけだと、それだけを考えて。僭越ながら、スクナなどのもお考えなのではないか？」

スクナは深く首肯した。「貴殿らには巨人族探索という任があるが、それは我らの仕事ではない。ありていに言って、我らはここに居たところで用がない」

ヘルガは息が止まる思いで成り行きを見守っていた。地上世界へ帰る方法があるなら、わずかな可能性に賭けてもでもそうしたいという気持ちはひそかに持ち続けてきた。が、彼女はその方法を見出せずにいた。

「だから、ダーヴェどの、どうか力を貸してもらいたい。少しでも安全な場所へ出るタイミングを、教えてほしい。貴公になら計算できるはずだ」

364.

ダーヴェが苦い面持ちでしぶしぶうなずくのを見届けて、バイスロイがずいっと話に加わってきた。

「スクナどの、貴公のほかに、何名同道できる？」

スクナはすでにその問題を考えていたようだった。まっすぐにバイスロイに目を当ててはっきりと言った。「私のほかに、一名。それ以上はできかねる」

ふたりは互いにしばらく見合っていた。

ふいに、ヘルガは背中を押され、前へ押し出された。そしてバイスロイの言うのを聞いた。「では、このおひとを頼む」

「バイスロイさま！」

「王女、そなたは行かねばならない。地下へ潜ったエウメロス人は三万人いるのだろう、その者たちには指導者が必要だ。わが父も三万ものエウメロス人に反乱でも起こされたらかなわない」

ヘルガは思わず言葉を呑み込んだ。弟、家臣、信頼できる者たちに後を託してきた。しかし誰にとっても経験のない長時間の閉塞空間、何がおこるか想像もつかない。エウメロス人と黄金門の間で起こるかもしれない衝突の危惧は、ずっと彼女を悩ませていた。

スクナは膝をつき、膝の上に手を置いて面を伏せた。「バイスロイどの……貴公をお救いするはずだったのだ。それがこんなことになるうとは……」

その傍らへ、ヘルガも膝をついた。バイスロイを助けようと勇んで飛び出してきた。そのことを考えると言葉も見つからなかった。

「いや」、とバイスロイも膝をついた。「転送システムをくぐり、冥界の底を旅する。こんな経験をする者はまたとなかろう。いつか、父や民たちにうんと自慢してやる。そして——かつてのメッサナのような国を創るのだ。私もかならず帰るからな」

365.

ヘルガは護身用に持ち歩いていた黒曜石の短刀をバイスロイに託す。

ヒューダーはそれに見覚えがある。ゴンの短刀。「オレはゴンから預かった。マミヤを助けてくれと」

「ぼくはヒューダーから預かった。マミヤとヘルガさまを助けたあとは——」、とイリチャ。

「助けてもらったお礼に指輪と交換したのだったわね」そのとき互いが交換できる唯一の物だった。

「それをいま、私が手にしているというわけか」

ゴンから託された短刀は持ち主を転々とし、この場でその者たちをつないでいるという不思議な巡り合わせだった。

「護りたいという強い念がこもっています。強運のお守りです。きっとあなたを護って

くれるでしょう」

皆から一人だけ離れてダーヴェは作業に没頭している。
(なんてことでしょう、メガネに入っているデータがなければ計算できないところでしたよ！)、とぶつぶつ言いながら。

バイスロイは、ダーヴェ一行と行動を共にすることに決まってから、自分のことを呼び捨てにしてくれ、と言った。敬称は要らないというのだった。ヒューダーも窮屈なことだと思っていたので、さっそく希望に沿うた。

「メッサナの音楽生迫害事件の被害者のことを、知りたがっていたら、バイスロイ。その娘は、メルノという名だ」

聞いたとたん、バイスロイは天を仰いだ。「やはりボムソワール家の！ あそこには姉妹が四人いた。その末娘だ」

「ボムソワール家というのか……」

ヒューダーの沈痛な口調にバイスロイは、はっ、となった。「まさか、ボムソワール一家にも被害が！？」

「……屋敷が……市民によってまるごと焼かれたそうさ。出入口はすべて外から塞がれ……」

「な、なぜだ、なぜ！ あの芸術家一家がそんな——！」

「理由がまったくわからないのだ。とにかく、謎の事件だ。そうか、メルノだけでなく、その家族とも面識があったのか」

「家族というか、一族だ、みな、驚くほど仲が良く、広大な屋敷にほとんど一族全員が揃っていた。それを——彼らがいったい何をしたと!？」

バイスロイは呻き、慟哭し、両手でこぶしをつくり、地面を殴りつけた。彼がこれほど感情をあらわにするのを。一行は初めて目にした。

「ボムソワール邸はメッサナの建築技術が作り出した傑作だった! そんなことは市民ならだれでも知っていたはずだ! 放火だと? ——狂ってる!!」

「それで、そのメルノだが……行方不明だそうだ。安否がわからんらしい」

ヒューダーはそう言い、スクナもまた、そう言うしかあるまいと思う。ミツハとメルノの関係は不明のままだ。

「生きているかもしれないのだな……」バイスロイは涙でぐしゃぐしゃの顔をあげた。もはや恥も外聞も体裁もなかった。

366.

「ぼく、メルノの歌を聴いたよ」

「メッサナの街角で、大勢の人に混じって」

「からだが震えた。ガタガタ震えて止まらないんだ。涙があとからあとからあふれて、わけがわからなかった。コモラさんは『あの歌を聞くと、打ちひしがれ、泣いてしま

う』、って言った。『自分が自分でなくなるような気持ちになる。自分ではないけど自分であるものが、胸の奥底で震えているのがわかる』って。うまく言えないけど、そうだなって思った……」

イリチャはぼつぼつと語る。もっと言いたいことがあるのだが、言葉にならないもどかしさ、苛立たしさをにじませている。

「音楽とはそういうものなのだ」、バイスロイはそう言う。「魂を奥底から揺さぶり、なにかに向かってかきたてる。自分が自分でなくなり、もっと大きななにかへ変身してしまう予感を感じさせる。そういう音楽に巡り合えた者は幸せだ」

「人間がもっと大きなものへ変身する？」ヒューダーは引き込まれるように口を挟んだ。

「そうだ。揺さぶられた魂とはすなわち人間の本質部分。それが浮上し、表面化する。それを変身と呼ぶのは違うかもしれぬ。本質を生きることは生命の本来の欲求であり目的であるはずではないか」

バイスロイは思いがけないことを言いだし、ヒューダーは呆然と彼を見つめずにいられない。彼の言葉そのものではなく、それが意味するかもしれないことに触れたような気がしたのだ。それはつまり――

(人間がその本質を生きようとすることを望まぬ存在――)

それゆえ、すぐれた音楽家が排除されたのではないか。

そんなビューダーの思惑をよそに、バイスロイはスクナとヘルガを交互に見て言った。

「もし、地上でメルノを見かけたら……伝えてくれないか。幸福な人生とは魂の求めるままに生きることだと、いつかその理想郷を築こうと、ボムソワールの稽古場で語りあった日々をバイスロイは永久に忘れない。いつか必ず、また会おう、と」

もしかしたら……ヘルガはそっと思った。この人は芸術を愛するのと同じ深みで、メルノという娘を愛していたのかもしれない。

367.

「スクナさん！ ヘルガ王女！ 計算結果が出ました！ 今、天の川とミクトランの間には砂漠があります！ 世界の果ての島からずっと西の方角にある大陸のなかの砂漠地帯です。少なくとも、深海や山奥ではありません」

「今。まさに今か」

「準備は大丈夫ですか。それとも時間を改めますか」

「なんの。それには及ばぬ。地上へ出さえすればなんとかなる。さ、ヘルガどの」

促されてヘルガはきっぱりとうなずいた。

別れというものは、心構えていたとしてもとつぜんやってくる。冥界から現世への移行はその逆と同じくらい特別な『別れ』である。往く者と残る者との間でせわしくも心

のこもった挨拶が交わされ、互いの幸運を祈りあう。

スクナは言う。「ダーヴェどの、無茶を言ってすまん。この恩はけっして忘れぬ。かならずや現世に戻られよ」

ダーヴェは目で笑ってしっかりとスクナの手を握り返した。

368.

結界が解かれ、スクナは見慣れつつあったミクトランの薄明のもと、精神統一に入る。

その時だった。バラムとバランケが同時に立ち上がった。どちらも耳を立ち上がらせ、なにごとか聞き取ろうとしている。それはバイスロイにも感じられた。ただならぬ雰囲気が出てくる。強烈な……悪意、嘲笑、そういった不快な感情が入り混じった負のエネルギー。

「イリチャ！」ヒューダーの低く鋭い声。「物質化した負のエネルギー。ミクトランの怪物だ。ケストル人じゃない。手加減するな」

イリチャはうなずき、武器の長棒を一振りする。すると棒の両端に鋭利な刃が現れた。ケストル人相手の時は引っ込めていた、双刃の槍だ。そしてスクナの邪魔をしないよう、目顔でヘルガに別れを告げ、声を放った。

「バラム！ バランケ！ 行こう！」

彼らはエネルギーが攻撃してくるのを待っていなかった。バイスロイはジャガーたちの五メートルもの段差を乗り越える跳躍、弦から放たれる弓のような疾走を幾度か目にしているが、イリチャが駆けるのを初めて見た。彼は、ふっと、ジャガーたちを抜いてしまったのだ。目の錯覚かと思まごう光景。そしてミクトランの地平線から現れた人間

のような姿をした黒い影に向かって槍を一閃する。黒い影は、ぱっ、と四散した。が、黒い体部の上に乗っている頭部を見たバイスロイはぞっと凍りついた。

顔面に無数のターコイズの薄片をモザイク状にした仮面をつけている。おそらく本来は死者ではなかろうか。細長いアーモンド形をした白い強膜の中央にあるのは、表情のない不透明な黒曜石の瞳。その下方に白っぽく強靱な歯列ががっしりと剥き出されているさまは、まるで骸骨である。

その感情の表出のない面は人間のそのものの造作であるだけに、衝撃的な忌まわしさ、嫌悪の感情を覚えずにいられない。ここが冥界の最下層であることをまざまざと思い出させ、認識させるものだった。

そしてバイスロイはあることを思い出して慄然とする。メッサナの建物を特徴づけていたメッサナブルーという色は、ターコイズのなかでも希少な澄んだ青色の石から作られるというのだ。そのターコイズが今、彼に悪意と嘲笑を向けている――！

嫌悪と激怒とがバイスロイの頭を殴りつけた。眼前が真っ赤に染まったかのように、目が眩んだ。これはメッサナに対する冒瀆だ！！

その時、怒りに震える腕を誰かにつかまれなければ、彼は衝動のままに怪物に向かって走り出していただろう。

ヒューダーが彼の腕をつかんでいる。「気持ちを鎮めるのだ。バイスロイ。黒曜石の短刀を握れ。スクナなどの精神統一を乱してはならん！」

369.

スクナは最初から怪物が現れた方角に背を向けていた。心を鎮め、気を集中し、『跳ぶ』タイミングを図る。時間は限られている。天の川は天を巡り、なんとしてでも避け

たい高山地帯か海上へと移動してしまう。彼の片手のひらは胸の前に立てられ、もう片手はヘルガが両手で握っている。

ジャガーとイリチャが殺気立って飛び出して行き、背後に異様な雰囲気の出現を感じる。その雰囲気は大蛇が現れた時に似ていた。だが、強度は較べようがない。まさに悪意と嘲笑が姿をとって現れたとしか思われぬもの凄さだ。

しかし——猛悪なエネルギーを相殺するエネルギーをも感じる。それは握り締めたヘルガの手からやってくるようだった。閉じた瞼の奥に黄金の小さな光、それがしだいに大きくなっていく。

(ああ)、とスクナは思った。(ヘルガどこの首飾りだ)

なぜか、黄金門の徴が力を添えてくれているという考えが浮かんだ。(気のせいかもしれないが……それで、かまわぬ！)

みるみる黄金の光は拡大し、スクナの意識を満たした。

行ける

なんら意識することなく、ごく自然に、スクナの力は解き放たれた。

ミクトランの地に悪意と嘲笑が解き放たれたのと同じだった。次の瞬間にはスクナとヘルガの姿は消えていた。

370.

瞬間移動で地上とミクトランとを行き来した事例を知らないと言った。地上から好き好んで冥界へ向かう人間はあまりいないだろうし。すると、俺は冥界から地上へ、言い方を変えるなら生き返る、希な人間になるということか？

『その間』、スクナはそんなことを考えるともなく考えていた。

そしてふと気づく。こんなに時間がかかるものなのか？ ぜんぜん、瞬間ではないじゃないか。いや待てよ、そういえばケストル闘技場からミクトランへ移動したときも妙に時間がかからなかったか？ これはまさか失敗というやつか？
まずいなあ。なんとかなるなんて、大見得切っちゃまったのに。なんとかせねば……ああいかん、珍しく緊張したせいか、眠くなってきた……なんてことだ、こんなときに。
しょせん俺は、皆がいうようにどうしようもない出来損ないだったってことか……ヘルガどのはどうされただろう、手を握り合っていたはずだが。もし……もし、死なせてしまったのなら、俺は死んでお詫びをせねば――

371.

「スクナさま……スクナさま！」

誰かがしきりに体を揺すっている。体は仰向けになっていて冷たい風と瞼に陽光を感じる。

陽光？

はっとスクナは身を起こした。陽光ということはここは地上だ！　すると体を揺すっているこの人は、「ヘルガどの！！？」思わず相手の手をつかむ。

「あ——すみません——」

相手は若干、気まずそうに言った。

「な？　なんでおぬしが？」

スクナはつかんだ手を気まずく手放した。

「えーと、ヘルガ王女ならそちらに」

言われて見れば、ヘルガはスクナの傍らに体を横たえていた。目を閉じているが、体には生气があり、死人ではなかった。安堵のあまり全身から力が抜ける思いのスクナである。

「ところでここはどこだ、アマセオ」

「空の上です。スクナさまはカガセオに乗っておられるのです。なかなかいい乗り心地

でしょう？ いま、世界の果ての島へ向かっています」

「待て待て待て！ どういうことだ、おぬしに拾ってもらったようだが、なぜだ？ そりゃたしかに世界の果ての島の西の大陸にある砂漠を目指して跳んだんだが」

372.

「トヨケ様が生還の祈願をしてくださったのです」

ぼかんと口を開けたまま、スクナは絶句した。すぐに言葉が出てこない。トヨケ様とはタカミムスビの最長老、仙人のごとき存在である。

「おじいさまが！？ まさか！ 信じられん！ 俺はおじいさまの孫の中でもひときわハズレていたものだから……俺のことでは常々、呆れ、御怒りあそばされていたという……だから、とうにお見捨てになられたものと思うていた……そうか、もしや、コタエのやつが」

無精ひげ中年男の口から出た『おじいさま』にはさすがのアマセオも後ずさり、カガセオもぐらりと傾いた。

「……じつは……黄金門の皇帝陛下とトヨケ様はご友人同士だったそうで」

「え」

「皇帝陛下は、スクナさまコタエさまご兄妹はトヨケ様の一族ではと、うすうす気づいておられたのだとか。それで、スクナさまが行方を絶たれてすぐ、呼びかけてくださるよう、コタエさまを通じてトヨケ様に申し入れをなされたのです」

なんとかなるといふ謂れのない確信も、精神統一の最中に黄金門の光を感じたのも、偶然でも錯覚でもなかったのだ！

「トヨケ様の命で多くの者がスクナ様の帰還が可能と思われる空域を警戒していました。もちろんわたしも。なにがなんでも、わたしがお助けするのだと……」

アマセオのまなざしがまだ気を失っているヘルガに向けられていることにスクナは気がついた。そのことにどうこう突っ込もうという気にはならなかった。アマノカガセオの、強固な信念を思い出したからだ。

「アマノカガセオ、礼をいうぞ、とにかく、ありがとう。それにしても、おじいさまに一目お会いして、ご挨拶せねば……」

今にも飛んでいきそうな勢いで気ぜわしく立ち上がろうとするスクナに、アマセオは落ち着いて手をのばし、制した。

「トヨケ様ご本人からお指図がされておまして、スクナ様を発見し次第、早急にトゥランの洞窟へ急行するようにと」

「……………」

「ただし、おそらく衰弱されているだろうから、ことに、エウメロスの王女殿下は相当ダメージが大きかろう、休養をとってからでよかろうと仰せられました。黄金門の陛下にはトヨケ様から連絡がされているはずですよ。ですから安心して、世界の果ての島で休養されてください」

瞬間移動による冥界からの脱出に、どれくらいエネルギーを要するものか想像できなかったのだが、その懸念は的中したといえた。スクナは高空で実体化し、力尽きて落下していくところを怪鳥のごときカガセオに受け止められたのだった。

たしかに、トヨケ長老に逢いに行こうと無理やり立ち上がろうにも、アマセオが差し伸べた手を振り払おうにも、それができなかった。体にまるで力が入らない。力の消耗は想像以上だった。助けがなければ地表に墜落してそれまでの運命だった。生きて戻ったことは奇跡以外のなにものでもなかったのだ。

じつにさまざまな力が働いて、自分は助けられたのだという事実がわかってきて、スクナは誰にともなくひれ伏すのだった。

373.

心地よくひんやりした空気を感じる。水のせせらぎ。風がさわさわと梢を鳴らしている。小鳥のさえずり。静かだが物音が満ち溢れている。生命の息吹。

——ここはどこ？ 私はなにをしているの？——

思いは浮かぶがたちまち眠気がおそってくる。たまらなく眠く、意識が閉じてしまう。

——心配いらぬ。なにもかも大丈夫

誰かに言い聞かされていると感じる。静かでやさしい声。若い女の声だ。私は行かなければならない、そう主張する気持ちがどこかにあるのだが、体をさするやわらかい手になだめられてしまう。

——眠って。あなたにできるのはそれだけ——

——あなたはだれ？　ここはどこ？

——眠って

抗う力もなく、彼女はいわれるままに眠りに落ちた。

374.

ふたたび意識が浮かび上がったとき、水の音を聞いた。しとしとと雨が降っているのだ。そのせいか、室内は少しばかり薄暗い。室の隅に灯火が灯っている。夜なのかもしれない。雨音に耳を傾けるうち、わけもなく恵みの雨なのだとわかる。土が水を受けとめ、植物たちが喜んでいいる。

考えるともなくそんなことを思っていると、明け放しの開口部の廊下を誰かがやってきた。半透明の柔らかな色調の布が外界とを仕切っていて、すらりと細長い葉を茂らせた植物のシルエットが見える。ひたひたとしのびやかな足音。現れたのは若い女。

長い黒髪をうなじで束ね、背中に流したその女の顔を見て、ヘルガは混乱した。思わず口走る。あなたは誰なのですか？

女は寝台の傍らの腰掛に座り、微笑んだ。清楚なものごしで。「私はミツハ。あなたのお世話を仰せつかっております」

「あの、私といっしょにいた人は……」

「スクナ様ですね。別室でお休みです。おふたりともたいそうお疲れでしたので、こち

らにお連れいたしました。ご安心なされませ、ここはスクナ様の故郷、この屋敷はスクナ様のご親族のものでございますゆえ」

ミツハと名乗った女はよどみのない口調で答え、持参した飲み物をヘルガに飲ませた。薬湯だった。香ばしく少し刺激のある風味が体内に落ちていくのを感じながらふたたび横になったとき、ヘルガは、はっとなった。首飾りが無い！

胸元に手を持って行ったヘルガの仕草に気づいたミツハは、少し、申し訳なさそうな顔をした。

「お着替えをさせていただきましたとき、首飾りはお外し致しました。とても重いものでございましたので、少しでもお体の負担も軽くした方がよろしかろうと、勝手ながら……外して、こちらに」ミツハは言いながら立ち上がり、寝台の反対側へまわり、サイドテーブルのような家具の上に置かれた木の箱をとりあげた。浅い箱は蓋付きの精巧なもので、蓋をとると、何重もの濃紫色の柔らかい布のなかに金の首飾りは埋まっていた。

留め具が変形している風でもなく、細かな細工の施された金の小さな板も、碧い宝玉も、失われているものはなく、ケストル闘技場の落盤に遭ったときに浴びた埃も汚れもなにひとつない状態で。

外されてみて、改めて重いものだったのだと気づく。そして妙な気持ちも起こってくる。バイスロイはこの首飾りは皇帝以外の者に外すことはできないと言わなかったか。今さら問いただすこともできないが、彼は単に知らなかったのか、それとも……嘘だったのかもしれない。

膝の上に箱ごと乗せてまじまじと見入っているヘルガに、ミツハはしずかに声をかけた。「大事なものだったのですね」

「はい。私のではないのです。本来の持ち主にお返ししなければなりません。ありがとうございます。ミツハさま。ていねいに扱ってください」

375.

「叔母上がひどく取り乱しておられたものですから、これは一大事だと思いましたよ」
「なるほど、おまえさんが一枚噛んでいたか。ま、現役の有力者のなかでじっさい、おまえほど力のある者はいないからな、コタエはちゃんと相手を選んでいたというわけだ」

オモイカネは陶器の茶碗をおいてスクナを見た。「なんだか引っかかるおっしゃり様ですねえ。気のせいかな。尊敬するコタエ叔母上がお困りならばわたしはなんだっていたします。それだけです」

「ありがたいことだ」スクナはどことなくひねくれた物言いをした。オモイカネはその容姿から能力から要領から、一族のなかでも超のつく優等生である。力があることはわかっているだけに、そんな者の世話になる羽目になったことが口惜しいらしい。

「いえいえ、たいしたことはできませんが、ここはだれにも知られていないあずまや、必要なだけ滞在していただいてもかまいません。ご入用のものがあればなんなりとおっしゃってください」、とスクナの屈託に取りあわず、鷹揚な態度をみせるオモイカネである。

「うむ、そうゆっくりとしてもいられんのだ」

「あのエウメロスの姫君を送り届けるのですね」

(お？ よくエロメウスといわなかったな)

「二度同じネタを使うほど暇ではありません」

「勝手に人の心のうちを読まんでもらいたい」

「姫君にいちど、ご挨拶をと思うのですが」

「……………」

「叔父上？ いけませんか？」

「——俺が何を見、聞き、経験してきたか、好きなだけ心を読むがいい。なんの隠し立てもするものか。しかし、王女に会うのはやめておけ」

「なぜです？」

「地下都市トゥランに避難した人々にとってその環境はおそらく永久的なもの。王女はそういう人々を率いる立場にある。おまえさんとは行く道が違い過ぎる」

「……トヨケ様にも同じことをいわれました」

「なんだって！？ 最初から止められていたのか！？ ったく！ 油断も隙もないやつだ！！」

「もっといえば、私のように経験の浅い者が王女に会うことは、彼女の精神の負担にしかならない、と」

「そう、そうだ、そういうことが言いたかったのだ、さすがはトヨケ様」

「少々、ショックでした」

「だろうな」

長老トヨケはこういった。そなたのようにたいして挫折も知らず、地獄に身を投じた経験もない者は、地下都市トゥランの住人となる道を選んだ存在に接触することは許さぬ、と。

その言葉はオモイカネの自尊心をへこますのに十分だったが、同時に疑問をも感じた。では、王女の世話係に任命されたあの娘には、その資格があるということか……？

376.

ヘルガがスクナに再会したのは、湯あみをしてからだった。

豊富に湧き出る湯には薬湯のような効果があるそうで、からだのあちこちにあったこわばりや痛み、心中に抱える重圧がほどけるように癒されるのを感じた。丹念にからだを洗い、髪を洗い、ひんやりした空気に立ちのぼる湯気に火照った頬をさらしている、なにもかもが夢のように思える。

湯からあがり、供された着物はコタエが身に着けていたものとよく似ていた。しぜんにコタエの見せる優雅な所作が思い出された。乾かした髪はミツハがゆるくまとめてくれた。その様子を鏡のなかに見ながら、マミヤといいコタエといい、よくよくこのくにのひとには縁があるのかもしれないと思うのだった。

ヘルガを一目みるなり、スクナはいっしゅん泣くような表情をみせ、それからすぐに破顔し、「お加減はいかがか」と訊いた。

「ずいぶん長いこと眠ったような気がいたします。でも、すっかり元気になりました。スクナさまは？」

「まあ、俺はさいしょっから頑丈にできてますんで、ちっとやそつこのことでは。が、とにもかくにも、無事でよろしゅうございました」

「ほんとに。スクナさまも」

スクナは体全体をつかってうなずいた。語りたことはいくらでもあったが、休養のためとはいえわずかでも別々の時間を過ごしていたせいか改めて顔を合わせるとなにより気恥ずかしく、ぎくしゃくした空気が流れてしまうのだった。そんな空気の中へミツハがひたひたとお茶を運んでくる。

初めて会ったミツハの、後姿、ふとした瞬間にみせる表情、ちょっとした仕草が、ヘルガは気になって仕方がない。どうしてもイリチャを連想してしまうのだ。

そうだ、スクナはこの娘をみてなんとも思わないのだろうか、ふとスクナに目を転ずると、スクナの目とぶつかった。その目には強い圧力があつた。

377.

「明朝、発とうと思う」スクナは言った。「いかがか」

ヘルガはうなずく。「異存はございません」むしろ、一刻もはやく発ちたかったのだが、スクナの力の回復を待たねばならなかった。冥界から地上への移動には想像以上のエネルギーが必要だったことをうかがわせた。ダーヴェェが躍起になって反対したわけだ。生還はまったく紙一重だったのだ。

食事の間に案内されると二人分の膳が用意されていた。ヘルガは、はたと胸に手をあて、それから笑みこぼれた。スクナがついげんげんな目を向けるとヘルガは言った。

「いえ……山の上でいただいた朝食を思い出してしまって」

彼女を載せた航空機がケストル-エウメロス国境付近で攻撃され、遭難した直後のことだ。エウメロスの一行に同行していたコタエのもとを訪れたスクナが、彼らのために朝食を用意したのだった。

「おお……そんなこともありましたなあ」

その後いったん分かれた道は、トゥランの地下都市への途上でふたたび出会い、ケストルへ、さらにミクトランへと続く。思えばふしぎな縁である。彼らは同時にそんな

感慨を抱いている。（けれども）、とまた同時に思うのである。この波乱に満ちた旅もまもなく……おそらく明日……終わるのだ、と。

378.

深い溪谷の縁にたち、満月に照らされてスクナは水の流れる音に耳を傾けていた。人の気配も動物の気配もない。壮絶な原初の森。彼が慣れ親しんだ世界。

「スクナさま……」、と澄んだ声に振り向けば、精霊のようにたおやかな娘の姿。

どちらの名で呼ぼう、いつとき、彼は迷った。しかしそう名乗るよう、望んだのは、そもそも彼自身だった。「ミツハどの」

「たいそう、世話になってしもうた。礼をいうぞ」

ミツハは微笑み、頭をさげた。彼女の身の上にタカミムスビ長老の力がはたらいたことを、彼女自身もスクナも知らない。

ミツハは言う。「いつかスクナさまのお役にたちたいと望んでおりましたゆえ。願いが叶ったのでございましょう」

「かたじけないことだ」スクナもまた頭をさげた。それからおもむろに切り出した。

「じつはな」、と。短時間で済ませなければならない。カンのするどいオモイカネの注意を引きたくなかった。

「そなたに伝言がある」

「——わたくしに、でございますか？」

「幸福な人生とは魂の求めるままに生きることだと、いつかその理想郷を築こうと、語

りあった日々を永久に忘れない。いつか必ず、また会おう」

その言葉がミツハのなかに落ちていき、咀嚼され、吸収されるのをスクナは待った。彼女の目がみるみる見開かれ、月光をはじく。「バー——」と言いかけ、あとは飲み込まれてしまった。

「心当たりがあるのだな」

ミツハの目が宙をさまよっている。彼女が初めて見せた生々しい驚愕の表情は、彼女がメルノである証しだった。

永久に忘れない、いつかかならず、とバイスロイは言った。その思いは今生を超えることを、彼は知っていたのかもしれない。

第二十三章 『ミクトラン脱出』

第二十四章へ続く

back number

第一部

『第一章 世界の果ての島』

はるか昔、ホシナ族の祖先は北方の故郷を出て南を目指した。長い旅の果てにたどり着いた島で、黒曜石の鉱山を得る。しかし、黒曜石の採石、加工、使用、すべて島の『王』の特別な許可によるものだった。

ある日、ホシナ族のもとにふたりの異国人がやって来た。ネウトラ評議会・学術調査団を名乗る彼らの目的は、絶滅危惧種である巨人族の調査だった。

『第二章 破滅の襲来』

調査行の最中に調査団長・ダーヴェとホシナ族の娘・マミヤの行方がわからなくなる。やはり行方不明の巨人と同様、何者かに拉致されたと考えた調査団メンバーのヒューダーとヤスウは島を後にし、ダーヴェたちの痕跡を追う。航行中の彼らは緊急事態信号をとらえ、発信元のエウメロス王国へ急行する。

『第三章 変態』

エウメロス王国を襲った巨人族はどこから来たのか。ヒューダーはエウメロスのレルを伴って隣国ケストル王国へ。両国の国境をなす険しい山脈のふもとに作られていたのは王家の離宮と闘技場。ひとりの少年を密入国させたかどで、ヒューダーは闘技場に引き出される羽目に。決闘の相手は当の少年。この闘技場が巨人族のホームだと直感したヒューダーだったが、己がイリチャ（槍）と名付けた少年に倒されてしまう。

※・サブタイトルについて。

オタマジヤクシがカエルに、イモムシが蝶に形態が変わるという意味での『変態』です。別の意味ではありません

『第四章 レムリアン・ラブソディ』

ケストルの闘技場でマミヤから渡されたダーヴェの眼鏡には、夥しい量の情報が納められていたことがわかる。それは巨人族の遠い祖先の濃密な記録だった。マミヤに眼鏡を託したダーヴェは南へと向かったらしい。世界の果ての島で仕切りなおしたヒューダーたちは、マミヤ、ヘルガ王女、ダーヴェの探索、そして巨人族の襲撃に遭ったネウトラ評議会本部へ向けて、それぞれ旅立つことになる。

第二部

『第五章 メッサナ』

エウメロス王国はヘルガ王女を取り戻すため、帰国したレル、黄金門市のバイスロイと共に動き出す。王女返還の申し入れを受けたケストル王は、王女にかかっていた魔法を解いて求めに応じるが……

一方、ヒューダーはイリチヤを伴ってメッサナ市に入る。メッサナは総督パンテオラが統治する巨大な石造都市にして知と美の殿堂である。ヒューダーの上司ダーヴェはここを訪れ、巨人族の謎を追ってジャガーのバラムと共にすでに立ち去っていた。ヒューダーはバラムの双子の弟バランケに先導させ、ダーヴェの後を追う。

『第六章 脱走巨人』

ヘルガ王女を乗せたエウメロス機はケストル機に襲われる。コタエと駆けつけたイリチヤとによって全員エウメロス領側に助け出されるが、そこには巨人が待っていた。コタエたちに襲いかかろうとする巨人をイリチヤが阻止するが、それはエウメロスの首都へ派遣された増援部隊から脱落した者だった。搭乗機を破壊され、国境付近の険しい高山にとり残されて身動きできない一行はそこで一夜を明かすことになる。そして夜半、レルはコタエに異変が起こっていることに気づく。

『第七章 メッサナからの逃亡』

知と美の殿堂メッサナで音楽家を志し、歌で多くの人々を魅了したメルノ。ある日突然、メルノに心酔していたはずの人々が当のメルノを攻撃し始める。悪意に満ちた激しい攻撃を見かねた人々は彼女を助けようと進んで支援するが、メッサナ郊外でメルノはひとり放置されてしまう。後戻りもできず湿地帯へと踏み込んだメルノは、幻を見、神と名乗る者と言葉を交わす。同じころ、ヤスウはネウトラ評議会本部を発ってメッサナを目指していた。

『第八章 IRITIYA』

人々に多大な影響を及ぼす力を秘めた芸術家を見出し、恐怖の中に放逐する。冥界の王が白羽の矢を立てたのが音楽家メルノだった。王は部下のベネトナシュを使ってメルノとメッサナの人々を恐怖に陥れようと画策していたのだった。メルノは死んだと報告するベネトナシュ。だが冥界の王はひそかにそれを疑う。

一方、イリチヤとマミヤとは、エウメロスの首都へ向かうレルらと別れ、メッサナ市を目指す。が、メッサナ総督府には異変が起こっていた。イリチヤは外部の隠れ家に潜んでいたコモラを探し出し、パンテオラ総督がアンベレオ本国の兵士に連れ去られたことを知る。

『第九章 原子の火』

のちの世に黄金郷と呼ばれるものを、メッサナ市は持っていた。総督家の本家筋にあたるアンベレオ王家は、拘束したパンテオラの身柄と金脈とを引き換えにしようとして画策を始める。パンテオラの代理を務めることになったパルダリス氏は本家の要求に激怒、そんな中、ネウトラ評議会がメッサナを抱える化学者の協力を要請してきた。評議会は巨人族侵攻対策のために原子炉を造ろうとしている。メッサナの化学者の長メンドルプは、それを知って震撼する。

2011年の原発事故を踏まえた『火精霊に聴く -原子の火に関する一問一答-』を収録しました。

『第十章 二極世界』

死神はメッサナの金脈がアンベレオの手に渡ることを好まない。その思惑は、アンベレオ王家とメッサナ総督家との全面的対立へと向かわせる。それは多くの物資をアンベレオ王国に依存する諸国と、知と美をメッサナから持ち帰った各国の人材たちとの対立へと発展する様相を見せていた。また、メッサナ化学者集団は巨人族対応を巡ってネウトラ評議会と対立する。

ヒューダーの要請に応じるイリチヤの旅立ちをひとりで見送るヤスウ。並外れた知と美の都の凋落が、ヤスウの目の前で始まろうとしていた。

第三部

『第十一章 天津甕星』

黒曜石に携わる人々・ホシナ族は原住民の民ではない。若い兵士アマセオは、昔、星に導かれてやってきたというホシナ族に親しみと興味を覚える。

ホシナ族と交わるうちに美しい青緑色の幻獣を見かけ、ますますホシナの地に惹かれるアマセオだった。

そんな中、アマセオの実家の使者がやってくる。使者が持ってきた知らせは、アマセオの妻に子どもが生まれたというものだった。族長夫人のオマキは大喜びするが、アマセオは激しく動揺する。生まれた子は三つ子。アマセオ自身も三つ子だった。それは生まれてはならない者だったからだ。

『第十二章 機織り族の野望』

王に献上された見事な織物。かつて王の正后に贈られた腹帯と同じ材質のものに見えたオモイカネは、それに触れたとたん、激的な反応を体験する。現政権の日読みを司る彼は、王に危害が及ぶ懸念からその織物を預かる。

一方、赤子と妻に会うため、帰郷したアマセオ。故郷は鳥を守護神とする神聖な織物の郷。妻の兄、タマシギと語り合ううち、タマシギが一族の持つ織物の権利の維持と織物の技術開発に並々ならぬ意欲を持っていることを知る。家を追い出され、家業に興味のないアマセオだったが、タマシギに対して違和感を覚える。そんななか、アマセオの子が怪鳥にさらわれる事件が起きた。

『第十三章 アマセオとカガセオ』

鳥の化け物がシトリを襲い、三つ子を連れ去った。三つ子の父親・アマセオは化け物を追う。シトリ一門の将来について、追放同然とはいえ嫡男であるアマセオと考えが食い違うことに気づいたタマシギは、この事実を即刻政庁に報告する。

報告を受けたフツヌシは、アマセオがかねてよりホシナ族と接近していることを懸念していた。

この国の仕組みは北極星を中心としている。一方、はるか過去に石器と狩りの技法と共に北からやって来たホシナ族は金星に導かれていたからだ。しかしこの国にとってホシナ族はなくてはならない存在であることがフツヌシを悩ませる。

アマセオの子をさらったのは、出生後に殺されたはずのアマセオの弟だった。弟はシトリの後継者であるアマセオの力になるべく、殺された後タマシギに憑依し、シトリを導いてきたことを告白する。ところが、タマシギの目的のためには手段を問わない強固な性格は、得体の知れないモノを深淵から呼び込んでしまった――

『第十四章 ヤサカオ 立つ』

ホシナ族の黒曜石事業拡大は政府から仕掛けられた罠だった。権利の拡大解釈を理由に、政権の軍部を司るフツヌシはホシナ族を討つべく行動を開始する。フツヌシはまた、アマセオを陥れる訴えをもタマシギから受けていた。

夜陰に紛れてホシナ族の地を訪問したスクナは、アマセオにすぐにこの地を離れるよう進言する。フツヌシの狙いを攪乱するためだった。そしてスクナは、タマシギに憑依したカラスの正体を知る。ミツハの中のメルノは言う。それは死神だと。

死神の登場に動揺したメルノはホシナ族を抜けようとするが、スクナから厳しい叱責を受けるのだった。

一方、アマセオと懇意の仲のヤサカオは、ひとつ問題を抱えていた。ホシナ族を存続の危機に陥れ、ホシナの娘マミヤ失踪のもととなった事件を起こしたゴンがヤサカオの息子だった。族長ホシナがゴンをホシナ族の者として扱ったため、ヤサカオの名は表沙汰にならなかったのだ。そのことを恩義と受け取ったヤサカオは、ホシナ族にかわってフツヌシを迎え撃つ。

『第十五章 ふたつの北極星』

かつて名を奪われ、取り上げられたわが子が意外にも近くにいると知ったミツハは彼女本来の力を取り戻し、カラス-死神と対決する決意を固める。

一方、フツヌシの軍団のひとつが農村を襲って村人を人質にホシナ族に投降を迫り、ホシナの郷をも襲おうと謀る。ホシナ族はもはや退路は断たれたと知り、そのやり方にアマセオは失望と怒りを覚え、フツヌシ、オモイカネに政府の真意を問いただす。

オモイカネは、現王の後継者を巡って政府内で陰謀が渦巻いていることを語る。王と深い関係にあるホシナ族は陰謀の犠牲になり、ヤサカオ族と共にフツヌシを負かしたアマセオは王位を巡る者にとって脅威的な存在になっていたのだった。

はたして、ホシナ族とアマセオの行方は。

第四部

『第十六章 トゥランの七つの洞窟』

冥界王に無断で世界の果ての島に手を出した死神は冥界王の怒りを買って、ついに見放される。

一方、ケストルの追撃を逃れた王女ヘルガはついに故国に帰還。信用のおける側近らと情報を交わすうち、ネウトラ評議会が巨人族の襲撃を受けて壊滅状態であること、また、メッサナ市に異変が起こり、封鎖されたことがわかる。そんななか、エウメロスの地下シェルターに逃れてきた黄金門市の皇帝は、エウメロスの生存者全員を地下シェルターに収容し、ひとつしかない入り口を塞ぐことを提案する。大陸の下には遠い過去に造られた巨大な都市があり、エウメロスの地下シェルターはその都市から伸びた枝道のひとつだった。皇帝の一族は驚異的な力をふるって地下道掘削に取りかかる。

『第十七章 ブルー・マーキュリー遭難』

巨人族を殲滅させるべく原子炉製造に意欲を燃やすティコ博士に頼もしい協力者が現れた。評議会西支部のコパーン博士である。メッサナ化学者団と決裂してしまったティコは、コパーンの進言を取り入れ、原子炉から原子爆弾へと舵を切っていく。その様子を耳にした黄金門の皇帝は、評議会には専門家がないのだと見抜く。いずれにしても地下へ潜ってしまったエウメロスには無関係なことだと思われた。ところが事態は急変する。コパーンがティコへ送った無人偵察機が行方不明になった。偵察機は爆弾の製造仕上げに使うブルー・マーキュリーという素材を掲載したまま、ケストル北方、氷河地帯でコントロール不能になったのである。ケストル王国が遠い昔、氷河の決壊によって洗い流された原野に建設されたことを知ったヘルガはケストルに留まっているバイスロイ救出に動き出す。

『第十八章 王女の冒険』

ケストル王国に向かったスクナとヘルガは、途中、アマセオと出会う。彼はホシナ族と行動を共にしてきたが、ホシナ族が安全な場所で逗留中、単独行動をしていたのだった。スクナらが大任を負っているのを知り、アマセオはケストル北方へと偵察にむかう。

ケストル王パウルと対峙し、国民らに避難を呼びかけたヘルガはバイスロイが王都にいないことを知る。彼は離宮へ招待されていたのだった。ヘルガにはおぞましい記憶の残る場所だったが、バイスロイ救出に急行する。しかし王都よりずっと北にある離宮は決壊した氷河に吞まれようとしていた。

『第十九章 ミクトランへの道』

ケストル闘技場からエウメロス地下シェルターへ移されたアマセオ。レル・ヴァリスは彼自身が保管していた闘技場の見取り図とアマセオが持ってきた情報が一致していること、そしてかつてダーヴェのメガネを解析したコタエの記憶から、ケストル闘技場には巨人族が出入りしていた機構があることに気づく。一方、破壊されつつある闘技場地下にある渦に飛び込んだバイスロイらはどこにも知れぬ場所に到達。バイスロイは到達地の特徴から、それが太古に失われた転送システムであると知る。

第五部

『第二十章 冥界の巨人』

バイスロイ一行を出迎えたのは、ネウトラ評議会のダーヴェ。ダーヴェはケストル闘技場から転送システムを使ってミクトランへ来たのだった。同じ方法で多くのケストル人がミクトランにやって来ていた。いくつもの事情で母国へ帰れなくなったケストル人は、ダーヴェらをつけ狙った。彼らは、転送システムのパスの機能をもつ『評議会の身分証』をもたらしした人間、ヒューダーをも恨んでいたのである。地上帰還の可能性がきわめて低いなか、ダーヴェたちは最大の謎、巨人族がどこからやってくるのかを解こうとしていた。

『第二十一章 メッサナの黄金郷』

ヒューダーとスクナとはホシナの郷について、イリチャについて情報を交換し合う。スクナはその見た目からメッサナからの逃亡者メルノはイリチャの身内ではないかと考えていた。しかしヒューダーは納得できない。メッサナ人とイリチャとでは外見の特徴が違い過ぎるからだ。

かつてメルノは、その名の者は死んだとし、偽名として自らミツハと名乗った。そのことを知ったヒューダーは、『ミツハ』とは水の精霊を表す音であると気がつく。古い伝説によればイリチャの母親は水の精霊である。

一方、メッサナ滞在中のヤスウとマミヤは総督代理パルダリスのもとに身を寄せていた。そこへメッサナの王家アンベレオの王、行幸の通達が届く。それは国王の行幸完了まで現在メッサナ市にいる者はその場を動いてはならないという命令でもあった。

『第二十二章 物質化した太陽光線』

黄金の力とは世界を清浄し、活性化させるもの。その働きは太陽と同質である。誰もが受け取ることのできる太陽光線と同様に、人は誰も黄金を受け取り、その浄化と活性化エネルギーによってより偉大な存在へと上昇する……

しかし黄金時代を象徴するメッサナ市は、音楽生迫害事件をきっかけに内側から崩れ、メッサナ市の

本家アンベレオ王国の植民地では黄金が高騰を始めた。
いまだ対処の手がかりもつかめない巨人族問題と相まって、世界は混迷を深める。

第二十三章のあとがき

表紙はアステカの『ジャガーの戦士』

今回のバイスロイの伝言は、今展開中のSalamander in…の、次の、次の物語のメインテーマとなるものでして、まさかここで、この人の口から出るとは、ちょっと筆者は考えていませんでした。ほんとに、書いてみないとわからないものです。

名前だけの登場ですが、スクナがおじいさまと敬っている『トヨケ』について。

伊勢神宮の内宮の主祭神は天照大御神。

外宮は豊受大神、古事記ではトヨウケヒメとされ（日本書記、先代旧事本紀には登場しない）、衣食住の守り神といわれていますが…ホツマツタエによると豊受大神とは5代タカミムスビ。

子世代に6代タカミムスビ（＝カンミムスビ）・イサナミ兄妹が、その子世代（1500人いたという）に7代タカミムスビ（＝タカギ）・スクナ・コタエ兄妹…この世代の誰かがアマセオの祖…が、その子世代に8代タカミムスビ・オモイカネ・タクハタチチヒメ兄妹がいる

というわけで、伊勢神宮外宮の豊受大神とは、イサナミの父にしてアマテルの母方の祖父。ちなみに父方の祖父はというと、

日本書記に…

一書に曰はく（第二）、

国常立尊が天鏡尊（あまのかがみのみこと）を生む。天鏡尊が天万尊（あまのよろずのみこと）を生む。天万尊が沫蕩尊（あわなぎのみこと）を生む。沫蕩尊が伊弉諾尊（いざなぎのみこと）を生む。沫蕩、これをアワナギという。

また、ホツマツタエに、

『アメヨロツ尊 ソアサ（四国）治し アワ（ナギ）・サク（ナギ）生めば』2文

『アワナギは 北の白山麓 チタル（中国地方）まで 法も通れば 生む御子の タカヒト（イサナギの齋名） カミロギ（イサナギの幼名）や』2文

…とある、アワナギの子がイサナギ、アマテルの父方の祖父はアワナギなのですね。

系図などはこちらを

<https://gejirin.com/src/To/toyoke.html>

系図を見ているとおもしろすぎてキリがないので、これくらいにしておきませう。

ではまた次回。

2023年9月4日 記

奥付

Salamander in the circle

第二十三章 ミクトラン脱出

2023年9月10日 初版発行

著者 峯村 明 [E-mail](#) blog [D & R](#)

表紙素材 [「月とサカナ」](#) [「freepik」](#).

制作 Puboo

発行所 デザインエッグ株式会社
